

ディクトグロスにおける談話形式の選定に向けた一考察 —独話と会話の比較から—

左雲萌夏・本間結

要旨

本稿では、学習者主体のディクトグロスにおける談話形式の選定基準を明らかにすることを目的にパイロット調査を行い、独話と会話を比較し、再生文の分析およびアンケート結果を通じて考察を行った。

その結果、独話は理解しやすさと記憶定着度で優位性を示した。独話の論理的構成は文章構造の把握に繋がり、短い音声でもその効果が確認できた。初中級段階での独話ディクトグロスは、将来的な長文理解のためのストラテジー習得に繋がると考えられる。会話は複数話者の存在や、相づち等による記憶定着の困難さが示された。それゆえに、ディクトグロスを行うことで、会話ストラテジー習得に有効である可能性が示唆された。

本調査は、学習者主体のディクトグロスの一助となる可能性を示すものである。

キーワード

ディクトグロス、独話、会話、学習者主体、聴解

1. はじめに

国際交流基金（2019）によると、ディクトグロスは、「聞く」「話す」「書く」「読む」の4技能の活動を統合的に行うことができる学習活動である。また、第二言語習得理論の観点から考えると、インプットとアウトプットの両方の活動が入っている。ディクトグロスは Wajnryb（1990）が考案した言語学習の手法であり、手順は 2.1 で述べる。

左雲・本間（2024）では、多人数クラスにおいて学習者主体のディクトグロスを行うことの有効性について調査を行った。その結果、翻訳ソフトに頼らず自分で考えようとする学習者が増え、継続的なディクトグロスは学習者の自信に繋がった可能性が示唆された。その一方で、会話形式と独話形式の2つの教材を使用したことにより、学習者がそれぞれの教材に慣れるための時間が少なかったことで、有効性を実証できなかった可能性も考えられると述べている。そのため、談話形式を1つに絞って実践を行うのが望ましいと考えられる。しかし、会話形式と独話形式のどちらを選択すべきか調査した研究は管見の限り見当たらない。そこで本調査では、それぞれの形式でディクトグロスを実施することで、ディクトグロスにおける会話形式と独話形式の選定基準を明らかにすることを目的とする。また本調査の結果は、授業内で実施する学習者主体のディクトグロスに活用することを視野に入れている。

2. 先行研究

2.1 ディクトグロスとは

ディクトグロスとは、Wajnryb（1990）が考案した言語学習の手法である。ディクトグ

ロスの基本的な手順は次のようになる。

- A) 短くて、内容の濃いテキストを通常のスピードで2回読み聞かせる。
- B) 学習者はテキストが読まれている間に知っている単語やフレーズのメモを取る。
- C) 小グループに分かれ、学習者は自分たちの断片的な知識を共有し、元のテキストを再構築する。
- D) それぞれのグループが再生するテキストは、文法的な正確性や結束性は求められるが、原文の複製でなくてもよい。
- E) 学習者は再生したテキストを分析・比較し、意見を交わしながら改良する。

(Wajnryb1990、pp. 5-6、筆者翻訳)

Wajnryb (1990) によると、ディクトグロスとはディクテーションとは異なり、聞き取った単語やフレーズから文を構築する過程を重視している。村野井 (2006) は、ディクトグロスは、比較的短く、内容の濃い (short&dense) まとまった文章を、教師が普通のスピードで数回読み、学習者はメモを取りながら聞き、聞き取ったことを基に、ペアまたはグループで協力してテキストを復元していく活動と定義できると述べている。

2.2 ディクトグロスのテキスト選定理由

ディクトグロスの実践を行った先行研究ではどのように談話形式を決定しているのだろうか。独話と会話のどちらを使用したのか判断できるものを調べたところ、独話9編、会話2編と独話の方が多い。先行研究の多くは Wajnryb (1990) が提唱する「短く、内容の濃い文章」という点を意識して選定しているようである。堀 (2014) では成人学習者にふさわしいものとして、一定の構成があり、出来事を聞き手に分かりやすく提示しているという点から、独話のニュースを取り上げたと述べている。高木 (2023) でも同様に 100-130 語程度の短くまとまりのある文章であり、時事的な話題や書き手の日常的な話が完結にまとめられている点を選定理由として独話形式を採用している。

その一方で、ディクトグロスの手順として教師がテキストを読み上げるため、会話文を使用することができなかったのではないかと推測できるものもあった (山口・尾崎 2013、武田 2018、高木 2023)。教師が読み上げることを前提としてしまうと、会話文を使用できない、非母語話者教師による実践が難しいといった問題点が挙げられる。

よって本稿では音声を VOICEVOX⁽¹⁾ で生成する。それにより、制約なく授業の目的に合わせて実践が行えると考えた。また、従来のディクトグロスで重視されてきた「短く、内容の濃い文章」に着目するだけではなく、他の観点からも談話形式を選定する必要性もあるのではないかと考える。

2.3 英語リスニングにおける独話と会話の比較

日本語教育の分野で独話と会話を比較し、リスニングの難易度について調べたものは管見の限り見当たらない。しかし、英語教育の分野では高松・荻原 (2018) がある。これは、筆者らにとって独話よりも会話の聞き取りの方が難しいという経験から、英語リスニングを困難にさせている原因を探ろうというものである。会話と独話を比較した結果、会話の方が簡潔な言語がスピーディーに発話されていることがわかった。よって、簡潔であ

るがゆえの情報量の少なさがスピーディーさという要因と重なることにより“相乗効果”的にリスニングを困難にしていることが推測された。また、及川・加藤（2011）では聴解における情報処理の過程は並行的相互作用アプローチ、つまりボトムアップ処理とトップダウン処理の2方向があると述べている。しかし、高松・荻原（2018）ではどれほどゆっくり再生しても認識できない単語が存在する、すなわち、ボトムアップ処理では対応できない部分があると述べている。よって、短い発話だからといって聞き取りやすいわけではなく、むしろある程度の長さがあった方がトップダウン処理ができるようになり、リスニングを容易にするのだろう。以上のように、英語教育においては会話と独話を比較し、その困難点について明らかにした研究が存在するが、日本語においても会話の聞き取りが独話よりも難しいのであろうか。

3. パイロット調査の概要

3.1 調査内容と参加者

本調査では独話と会話のディクトグロスを実施し、その結果及び実施後のアンケート結果を分析した。本研究は、参加者全員から研究参加に対する同意を得たうえで、授業外に実施した。参加者には両形式を実施した。参加者はタイ国内の大学の日本語学科に在籍する3年生7名、4年生6名、そして日本語学科卒業生1名の合計14名である。JLPTのレベルはN5が1名、N3が9名、N2が1名、JLPTを持っていない者が3名であった。この3名は、初中級レベルの学習を終えている。

本調査で使用した独話と会話は、日本とタイに関連のある内容を Claude ai⁽²⁾を用いて作成し、その後筆者が修正した。本調査で使用したテキストの詳細を表1に示す。語数と語彙の難易度は J-LEX⁽³⁾を用いて判定した。独話、会話ともに語彙の難易度は初級が75%程度、中級前半が20%未満である。

表1 ディクトグロスで使用したテキストの詳細

形式	独話（26 秒）	形式	会話（27 秒）
タイトル	両国の伝統的なお祭り	タイトル	日本とタイの食文化
文字数	141 字（5 文）	文字数	131 字（6 文）
語数	82 語	語数	79 語
初級レベル	60/82 75.6%	初級レベル	60/79 75.9%
中級前半レベル	16/82 19.5%	中級前半レベル	13/79 16.4%
日本とタイには、特別なお祭りがあります。日本では、夏に花火大会や盆踊りがあります。タイでは、ソンクラーンという水かけ祭りが有名です。日本のお祭りは季節と関係があり、タイのお祭りは人々が交流する機会になっています。両国のお祭りでは、伝統的な服を着たり、特別な食べ物を楽しんだりします。		A: 日本の食文化って季節を大切にするよね。 B: そうだね。 A: でも、タイは季節よりも、辛さや酸っぱさのバランスを重視するんだ。 B: へえ、面白いね。食文化の違いを知ると、その国のことがよく分かるね。 A: 本当だね。これからもっと色々な国の食文化について調べてみたくなったよ。	

音声は VOICEVOX で生成し、独話は女性の声（VOICEVOX：四国めたん）を採用した。会話は男女の会話とし、A を女性（VOICEVOX：四国めたん）、B を男性（VOICEVOX：玄野武

宏) で生成した。教師が読み上げるのではなく音声で生成することで、母語話者・非母語話者を問わず、どのような教師でも負担なく実施できるようにすることも、学習者主体のディクトグロスの利点の一つだからである。

3.2 学習者主体のディクトグロス

左雲・本間 (2024) は、学習者主体のディクトグロスを行うことで、協働学習の効果により学習者が意欲的に活動に取り組み、再生語数の増加に影響を与えたと示唆している。左雲・本間 (2024) の学習者主体のディクトグロスは、多人数クラスであっても、教師の介入を減らすことで、学習者同士の気づきから効果的な学習へとつなげている点が特徴である。そこで本調査においても学習者主体のアプローチを重視し、参加者が主体的に取り組む活動を目指した。本調査における学習者主体のディクトグロスの手順は以下の通りである。左雲・本間 (2024) が考案した手順を基盤としながら、修正を加えたものである。

- A) 学習者にディクトグロスのテーマを伝える。
- B) VOICEVOX で生成した音声を通常のスピードで 3 回聞かせ、メモを取らせる。速度はすべて通常速度とし、1 回目と 2 回目、2 回目と 3 回目の間にそれぞれ 10 秒空ける。
- C) 学習者同士で 3 人組もしくは 4 人組になるよう指示する。
- D) グループで相談しながら、約 10 分で聞いた音声とできるだけ同じ内容になるよう、書き起こす作業を行う。
- E) D の後、ペアになるよう指示する。ペアを作る際には、1 回目の復元作業を行ったグループとは違うグループの学習者とペアになるよう指示する。
- F) 同様に 5 分ほど時間を取り、お互いの内容を確認しながら、不足部分や間違いを話し合う。同時に、D の再生文に違う色で加筆、修正する作業を行う⁽⁴⁾。
- G) 最後にもう一度音声を聞かせながら、解答を見せ、学習者は自分の解答を確認する。解答はすべてにふりがなを付け、質疑応答の時間を設ける。

本調査のディクトグロスは、教師の負担軽減と授業への導入のしやすさを考慮し、テキストの音声の長さを 30 秒程度に設定している。左雲・本間 (2024) と比較しテキストが短いため、各作業時間を短縮する一方で、解答確認と質疑応答の時間を確保した。両者の具体的な違いを表 2 に示す。

表 2 左雲・本間 (2024) と本調査のディクトグロス手順の違い

項目	左雲・本間 (2024)	本調査
音声	使用教材の付属音声を使用 1 回目：通常速度 2 回目：文の切れ目で 3 秒のポーズ 3 回目：2 回目よりも短いポーズ	VOICEVOX で生成した音声を使用 3 回すべて通常速度 1 回目と 2 回目、2 回目と 3 回目の間に 10 秒空ける
グループ	基本的に 3 人組 (2 人組も可)	3 人組もしくは 4 人組
時間	復元作業時間 約 15 分	復元作業時間 約 10 分
	ペアでの確認時間 10-15 分	ペアでの確認時間 5 分
フィードバック	音声を聞きながら個人で確認	音声を聞きながら解答を確認 漢字にふりがな付きの解答提示 質疑応答の時間あり

教師の役割は、1) 音声の提示、2) グループ編成の指示、3) 机間巡視、4) 解答提示と質疑応答の4点に限定した。このように教師の介入を最小限に抑え、学習者主体の言語学習環境を構築することを目指した。

3.3 分析方法

本調査では、ディクトグロスの再生文とアンケート結果を分析した。分析方法としては、まず、ディクトグロスのテキストからすべての自立語を抽出した。次に、参加者の再生文にその自立語または同義語が記載されていた場合には「1」、記載されていなかった場合には「0」とし、これに基づいて再生率を算出した。自立語数を分析に用いた理由は、左雲・本間（2024）が指摘しているように、日本語において意味のある語彙は自立語であり、この数を測ることで意味のある量的分析が可能になると考えたからである。

調査後、独話と会話に関する参加者の反応と評価を調査するため、アンケートを実施した。詳細は表3に示す。質問4～8は選択式の回答の他に、その選択肢を選んだ理由を自由記述形式で求めた。なお、質問は日本語とタイ語の両方で書き、回答もどちらも可とした。

表3 アンケートの質問項目

1. ディクトグロス活動の難易度はどうでしたか？ とても簡単 簡単 ちょうどいい 難しい とても難しい	
2. 活動の時間配分は適切でしたか？ 短すぎる 少し短い ちょうどいい 少し長い 長すぎる	
3. 使用された音声教材の内容は面白かったですか？ まったく面白くない あまり面白くない どちらも言えない 少し面白い とても面白い	
独話と会話について	選択肢：独話 会話 どちらも同じぐらい
4. どちらのパターンがより理解しやすかったですか？	
5. どちらのパターンがより記憶に残りやすかったですか？	
6. どちらのパターンがより文を作りやすかったですか？	
7. どちらのパターンがより日本語学習に役立つと感じましたか？	
8. 今後のディクトグロス活動では、どちらのパターンをより多く取り入れるべきだと思いますか？	
9. 自分の作った文と答えを確認する方法はどうでしたか。 とても良い 良い ふつう あまり良くない まったく良くない	
10. この活動で改善すべき点があれば、具体的に教えてください。（自由記述）	
11. ディクトグロス活動全体の感想を教えてください。（自由記述）	

4. 分析結果

4.1 再生文の分析結果

独話と会話のディクトグロスの再生率を以下の表4に示す。以下の結果は3.2で示した手順のFが終了したのち、参加者に提出してもらったデータである。すなわち、グループでの復元作業、ペアでの修正作業を経て提出されたもので、データの提出後に解答を音声と文字で提示している。なお、データはPDFか写真の形式で提出されているため、参加者は自身の再生文が手元にある状態で解答を確認することができている。

表 4 独話と会話の再生文の語数

	総自立語数	平均再生語数	標準偏差	平均再生率
独話	34 語	22.36 語	4.13	65.76%
会話	28 語	20.43 語	2.26	72.96%

以上の結果を見ると、独話・会話どちらも 6 割以上再生することができており、グループでの書き起こし作業、ペアでの修正作業を経て、ある程度高い再生率で書き起こすことができていることがわかる。

4.2 アンケート結果

結果は紙幅の関係上、特筆すべき項目に絞って述べる。3.3 でも述べた通り、回答は日本語とタイ語のどちらも可とし、回答者 14 名中 3 名は日本語で回答していた。11 名の回答はタイ語母語話者の協力を得て、日本語に翻訳した。

設問 1、2 に対して「ちょうどいい」と回答した参加者は 72%、79%であり、適切な難易度と時間配分であったことが明らかになった。また設問 11 に対して、「他の人と答えを交換したりする活動はとても楽しい」、「内容に対する自分の認識と理解を確認できる」（原文タイ語）といった、学習者主体で取り組む形式に好感を示している参加者も多かった。具体的には、どのぐらい文章を復元できたかによって、自分の今の日本語能力を把握できた点が好ましいとされた。さらに同じぐらいのレベルの参加者と一緒に文章を復元することで、他者と比較しながら自分の日本語能力を実感できたという肯定的な意見も見られた。

続いて、独話と会話を比較しながら質問した項目の中で、特筆すべき点を挙げる。

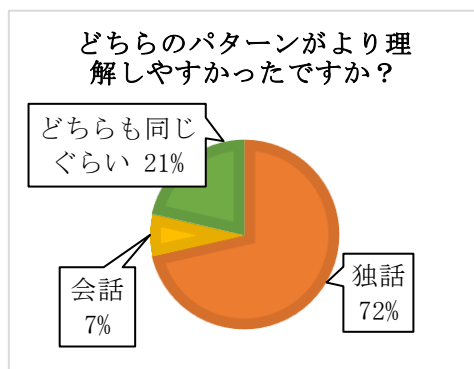


図 1 設問 4 の結果（理解度）

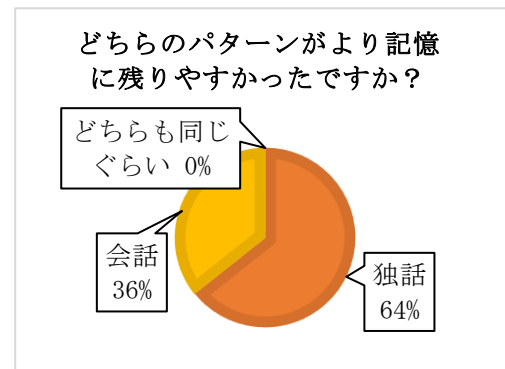


図 2 設問 5 の結果（記憶定着度）

図 1、2 によると、理解のしやすさ、記憶の残りやすさともに独話の方が高かった。独話の方が理解しやすかった理由として、「独話はストーリーが 1 つで、1 人の意見だからわかりやすい」「独話だとパターンがあるから、クリアでわかりやすい」（原文タイ語）などが挙げられた。一方で、会話の方が理解しにくい理由を挙げている参加者もいた。その理由として、「今話している人が女性か男性か気にしていたので、内容を聞くのを忘れた」（原文タイ語）と答えており、複数の話者がいることで聞き取りに集中できないことがわかった。また、記憶の残りやすさに関する理由は「長い話で話すと記憶に残りやすく

なる」「会話は『へえ』、『そうだ』みたいな単語があるから、独話より覚えにくい」(原文タイ語)などが挙げられた。高松・荻原(2018)でも述べられていたとおり、簡潔であるがゆえの情報量の少なさがリスニングを困難にしているのではないかという推測がここでも確認できた。

5. 考察

5.1 独話と会話の有効性

4.1 の再生文の分析結果より、本調査において独話と会話の再生率の平均値はそれぞれ 65%と 72%であった。どちらも 6 割以上の再生率であるにもかかわらず、新(2024)が指摘するように、独話の聴解練習は初級教材において十分に扱われていない現状がある。本調査の結果は、まとまりのある文章に触れる機会が少ない初中級の学生に対して、独話のディクトグロスを取り入れる意義を示唆するものと考えられる。

また 4.2 のアンケート結果の設問 1、2、11 から、本調査の学習者主体のディクトグロスは、談話形式を問わず実践に値すると推測できる。しかし、理解度および記憶定着度の両面においては、会話と比較して独話の方がインプットしやすいという認識が示された。自由記述形式の設問によれば、独話は内容の展開が一貫しており理解が容易であるという評価が得られた一方で、会話では複数の話者が存在するために注意力の分散が生じるという課題が指摘された。注目すべき点として、参加者は独話の内容理解が容易であると認識しているものの、独話と会話の再生率はともに 6 割から 7 割という近似した数値を示している。この結果の要因としては、会話には「そうだね」「面白いね」「本当だね」などの相づち表現が含まれており、これらの語彙は内容との関連性が低いものの、ほとんどの参加者が聞き取れていた点が挙げられる。

5.2 独話と会話の特性に着目した効果

5.1 の独話と会話の有効性から、両形式にそれぞれ特有の教育的価値が確認された。

独話については、初中級の段階からまとまりのある文章に触れる機会を持つことが重要である一方、初級教材では独話形式の聴解練習が不十分な状況にある。4.2 のアンケート結果から、理解のしやすさ、記憶の定着度において独話の優位性が示されたことから、初中級の段階からの導入が可能である。独話は論理的な構成を持つことが多いため、学習者は文章全体の流れや論理展開を追いやすくなり、まとまりのある文章の構造を理解する力の向上が期待できる。自由記述では「独話だとパターンがあるから、クリアでわかりやすい」(原文タイ語)という意見が見られ、本実践で使用した 30 秒程度の短い音声でも文章構造を理解できている様子がうかがえた。初中級の段階で独話のディクトグロスに取り組み、文章構造を捉えるためのストラテジーを獲得することは、今後中級以上で扱うより長い文章の理解にもつながると考えられる。

会話の場合、複数の話者の存在により理解の難度は上がるものの、4.1 の結果が示すように独話と会話の再生率は近似した数値を示した。しかし前述したとおり、初級教材は会話形式が主流であり、豊富な教材から学習レベルや目的に合わせた選択することが可能である。またアンケート結果において、「会話は『へえ』、『そうだ』みたいな単語があるから、独話より覚えにくい」(原文タイ語)というコメントがあった。会話形式のディクト

グロスを行うことは相づちや聞き返しなどの会話ストラテジーを理解する手助けになる可能性を示唆している。

6. おわりに

本調査では、学習者主体のディクトグロスにおける談話形式の選定基準を明らかにすることを目的に、独話と会話を比較し、再生文の分析およびアンケート結果を通じて考察を行った。その結果、独話は理解しやすさと記憶定着度で優位性を示した。独話の論理的構成は文章構造の把握に繋がり、短い音声でもその効果が確認できた。初中級段階での独話ディクトグロスは、将来的な長文理解のためのストラテジー習得に繋がると考えられる。会話は複数話者の存在や、相づち等による記憶定着の困難さが示された。それゆえに、ディクトグロスを行うことで、会話ストラテジー習得に有効である可能性が示唆された。本調査は、学習者主体のディクトグロスの一助となる可能性を示すものである。

課題として、各形式における最適な実施回数及び、日本語レベルに対応した音声の長さの検討、長期的な学習効果の実証が必要である。今後は 5.2 で示した効果をもとに実践に移し、その検証および学習者主体のディクトグロスのさらなる改善を図りたい。

(左雲萌夏・さくももえか・チェンマイ大学)

(本間結・ほんまゆい・チェンマイ大学)

注

1. 2021 年にヒホ（ヒロシバ）によってリリースされたテキスト読み上げ用音声合成ソフトウェアである。
2. Anthropic 社が提供する生成 AI である。Anthropic(2025) Claude 3.5 Sonnet [Conversation/output on September 23, 2024] <<https://www.anthropic.com/claude>>
3. 菅長陽一・松下達彦（2013）「日本語テキスト語彙分析器 J-LEX」 <<http://www17408ui.sakura.ne.jp/#hpb-container>>（2025 年 3 月 30 日閲覧）
4. D で書き起こした文、F で加筆・修正した文をそれぞれ再生文とする。

参考文献

- 新聖子（2024）「講義聴解へつなげる独話の聴解授業」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』22, 81-96.
- 及川浩和・加藤直樹（2011）「留学生の聴解ストラテジーを育てるための学習カリキュラム開発」『年会論文集』20, 286-287.
- 国際交流基金（2019）「日本語教育通信 授業のヒント『ディクトグロス』をやってみよう！」 <<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/hint/201901.html>>（2025年1月27日閲覧）
- 左雲萌夏・本間結（2024）「多人数聴解クラスにおけるディクトグロスの効果—学習者主体の指導法の提案—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』16, 19-27.
- 高木哲也（2023）「「時制」の習熟を目指したディクトグロスの実践:ICT を活用した筆記ランゲージングを加えて」『筑波大学附属高等学校研究紀要』64, 61-75.

- 高松直子・荻原洋（2018）「英語会話の言語的特徴の分析とリスニング指導に関する一考察」『富山大学人間発達科学部紀要』12(2), 95-102.
- 武田知子（2018）「中級日本語クラスにおけるディクトグロスの実践」『日本語教育方法研究会誌』24(2), 124-125.
- 堀恵子（2014）「アウトプット重視の授業におけるディクトグロス導入の試みー中級前半のプロジェクトワークの準備としてー」『日本語教育方法研究会誌』21(2), 46-47.
- 村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- 山口恵子・尾崎和香子（2013）「総合的な日本語運用力の向上を目指してーディクトグロスの試みー」『2013 年 WEB 版日本語教育実践研究フォーラム報告』1-10.
- WAJNRYB, R. (1990) *Grammar Dictation*, Oxford University Press